



1920s



1960s

北海道大学150年史 編集ニュース

第4号 2020年2月25日

目次

〔巻頭コラム〕

沖縄からの「留学生」（前編）

近藤健一郎 …… 2

〔北大歴史ノート 第4話〕

1945年度の子科入試 …………… 4

〔北大風景グラフIV〕

医学部・病院の門 …………… 5

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ …………… 6

〔活動紹介〕 日誌 pick up …………… 7

編集後記等 …………… 8



2010s

〔巻頭コラム〕

沖縄からの「留学生」(前編)

近藤 健一郎
(教育学研究院教授)

ここに北海道大学に関して報じた『琉球新報』(沖縄で発行されている新聞)の1958年の記事3点がある。それらは、7月15日の夕刊4面と翌16日の夕刊4面に掲載された《沖縄出身の北海道大学生座談会》(上下編)と、8月27日の夕刊4面に掲載された「学園だより 北海道大学」である。これらの記事をきっかけとして、本号と次号の2回にわたり、北海道大学が在学生を介してどのように報じられていたかを紹介するとともに、この当時の沖縄からの北海道大学ならびに大学進学について記したい。

7月15日と16日に掲載された座談会に臨んでいるのは、新垣裕弘氏(医学部4年)、浦崎永徳氏(農学部3年)、西銘龍雄氏(理学部3年)、島袋全功氏(教養部2年)、砂川隆久氏(教養部1年)の北大生5名と、北大学生部学生課長佐藤正一氏、学生部学生課職員館岡松太郎氏、そして取材者である琉球新報東京総局長の伊豆見氏(名は不詳)の計8名である(北大生の氏名は数年分の『北海道大学一覽』により確認、修正を行ない、北大職員の氏名は北海道大学『職員住所録』1958年により確認し名や所属を補った。また、医学部学生の学年は、教養部からの通算年数で数えた)。

琉球新報伊豆見記者は、1958年7月上旬に来道したと思われ、7月5日に開幕した北海道大博覧会での小樽埠頭会場での沖縄舞踊公演(7月7日)、7月6日に南方同胞援護会と北海タイムス社共催で札幌市民会館において開かれた「沖縄と小笠原の夕」での沖縄写真展や沖縄風物スライド映写会などを取材した。なかでも、琉球新報社が提供していた沖縄写真展に関しては、同氏の署名記事が見られる(「沖縄写真展にぎわう 北海道遺族の関心深め」、『琉球新報』1958年7月8日夕刊3面)。伊豆見記者来道中の

「七月のある日札幌ホテル食堂で同郷の学徒たちと腹藏なく語り合う機会を得た」として掲載されたものが、この座談会記事である。

この記事は、北海道の広さ、冬の暮らし、北海道の人々が沖縄に対してもっている印象、北海道の方言、沖縄の学生の態度、学資、後輩への注文、5名以外の北大生について、伊豆見記者が北大生や北大職員に尋ねるよう展開している。学生たちは、沖縄から来た我々に会いたくはないと見たいと言われたり、日本語は話せるかと言われたりするなど、好奇の眼にさらされながらも、米軍基地との関係で政治問題であった沖縄での土地収収が報道されれば質問攻めにあうように、周囲の人々が沖縄について知ろうとしていることを述べる。そして、授業料免除のほか、文部省や沖縄育英会から奨学金や書籍代、衣料費などが支給されると学資について説明するが、「街に出かけて飲み食いするほどの余裕はありません」(新垣裕弘氏)という。あわせて、「石狩ナベはおいしかったなあ。学生課の先生方と一緒に年に一二度、郊外へピクニックに出かけるんです」(浦崎永徳氏)と、沖縄育英会からの補導費によって行われるピクニックの思い出も語られる。そして、これから進学する後輩への注文を尋ねられたことに対して、地方の国立大学も大都会の大学に劣らないことや、北海道大学医学部のガン研究に続いて、「農学部を志望する人は北大でなくてはダメだと思う。寒地農業技術がいまでは熱帯地方にも適用されつつあるからです」(浦崎永徳氏)などと返答するのであった。最後に、座談会に出席している5名以外に、3名の北大生がいることも記される。金城俊夫氏(獣医学研究科大学院生)、崎山用演氏(医学部3年)、當間正次氏(教養部2年)の3氏である(前述の5名と同様に、数年分の『北海道大学一覽』により氏

名の確認と所属の加筆を行なった)。

8月27日の記事「学園だより 北海道大学」は、この座談会に臨んだ浦崎永徳氏が提供した理学部校舎、現在の総合博物館の正面入口の写真に、記者が短い北大紹介を添えたものである。そこでは、「エルムの学園」と呼ばれる美しいキャンパス、クラークの「青年よ大志を抱け」のとおり、「若人たちが勉学に励み、また思う存分に青春を楽しんでいる」と述べられる。そして、「札幌農学校といわれた時代から、北大は今もつづいてこの“ニレの木陰”にあり、それが一つの伝統と、学生たちの誇りになっている」と結ぶ。この伝統や誇りは、おそらく記者が北海道大学を訪れ、北大生らと話すことを通じて

感じたものであったのだろう。

北海道大学が創基125年を期して2001年に編集、発行した『北大の125年』103頁には、「沖縄出身の学生も72年の沖縄復帰までは『外国人留学生』として在学していた。その人数は、国費と私費を合わせ、72年までに60人である」と、アメリカ占領下にあった沖縄からの「留学生」のことを記している。沖縄からの大学入学者が「留学生」であった時期があったのである。それでは、どのようにして沖縄から北海道大学へ入学していたのであろうか。次号では、その点を論じたい。

北海道大

……郷土出身……

学生座談会

(下)

「沖縄の学生の態度はどうか」
佐藤先生 みんなおとなしく熱心

「もう少しで卒業も近い方です」
館岡部長 一般にまじめですが、

「学生課には用務以外には訪ねて来ません。もともと積極的に遊びに来たはいいです」
浦崎 石狩市はおいしかったなあ。あ学生課の先生と一緒に行きたい。二度、郊外へベテニックに出かけるといいです。

「石狩市はおいしいのは魚のサケを主にした料理で、種類もあり、ジンズカンパや牛ナベ、柳川と、はまな産の風味があり、北海道まで来て甲斐があったと思ってい

「この費用は沖縄県英会館の補助でやっています」
新垣 文部省から月に五千六百元。育英費が月に一千九百元、計七

「千五百円(日食内)でやっています。授業料は免除されていますが、街に出かけて飲み食いするほどの余裕はありません」
砂川 このほか年間には補給六千

「東大より北大がいいといわれるほどには伝統の権威が、ありレベルも高い」
浦崎 慶学部を志す人は北

「あなたが仲間がありますねえ。最初は何もなかったが、異常な位に集結しています。東京へ東大へと早水もななく(笑)これは受験難校や多形時のせいですが、こんな難関の難校をたいてい東京や大阪、京都の志に集中してい

「北大が先端を切っている」
佐藤先生 応用化学は北大が京大に次いでいいといわれています。東大よりは北大がいいといわれるほどには伝統の権威が、ありレベルも高い」

「大でなくてはダメだと思っ。寒地農業技術がいまでは熱帯地方にも適用されつつあるからです。これは早期栽培という点からいえることです」
「沖縄の高校生は北海道が寒いので敬遠しているんじゃないですか」
新垣 寒さをいやがっているかも知れませんが、さっきも申し上げたとおり、寒い国ほど農務施設は整備しているのです。北大に入ると全国旅行ができますよ。北の果てから本州を縦断して鹿児島まで行くんですからね」

「出 席 者」

浦崎永徳君 (慶学部農学科三年那覇高 校卒)

新垣裕弘君 (医学部医学科二年那覇高 校卒)

西銘静雄君 (理学部地球物理学科三年 知念高 校卒)

砂川隆夫君 (教養学部一年、宮古高 校卒)

島袋全功君 (教養学部一年八重山高 校卒)

佐藤学生課長 館岡学生部員 本谷伊豆早稲科長

「新垣 寒さをいやがっているかも知れませんが、さっきも申し上げたとおり、寒い国ほど農務施設は整備しているのです。北大に入ると全国旅行ができますよ。北の果てから本州を縦断して鹿児島まで行くんですからね」

佐藤先生 寒気対策については出来るだけのことをしていきますから、少しは北大に来て頂きたい。」「琉球新報主催の六学入試模試を受けたいことがありますか」

浦崎 ほくは一回うけました。五十番位だったかな(笑)

島袋 三回うけました。成績は忘れまして。

砂川 一回うけて一回目は六番二回目は七番でした。

浦崎 新報の問題はレベルが高くて最初はびっくりしました。」「北大にはこの諸君のほかにもたくさんいますか」

館岡部長 大学院に金城俊夫君、医学部一年に筒山用典君、教養学部一年に当間正次君がいます。」「まうはお忙しいところを有難うございました。

大学生活や北大の魅力を語る

『琉球新報』1958年7月16日付け夕刊4面 (沖縄県立図書館蔵)

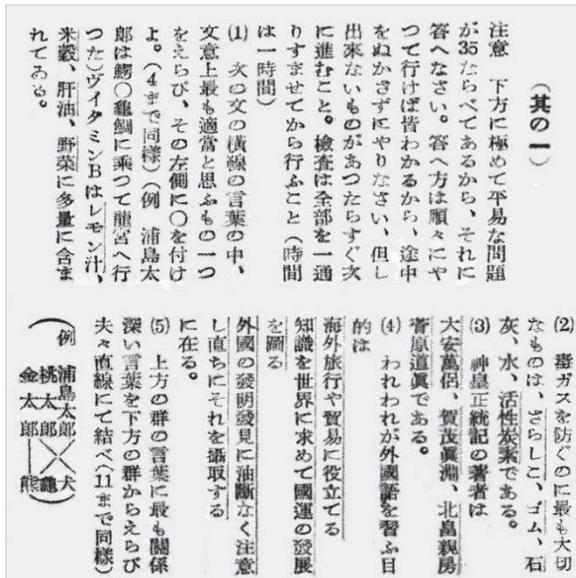
北大歴史ノート 第4話

1945年度の子科入試

1945年度の入試問題

官立の高等学校、大学予科等の1945年度入学試験には、文部省作成の共通問題が用いられた。北海道帝国大学は、学内に高等学校相当の「大学予科」を付設し、予科修了生徒が学部学生の多くを占めており、他人事ではなかった。

試験問題の実物は未見だが、受験雑誌に掲載された「昭和二十年度官立高校大学予科入学筆答試問問題」（『蛭雪時代』1945年3月号）から内容をうかがうことができる。



『蛭雪時代』掲載の1945年度入試問題（国立国会図書館蔵）

大問「其の一」には「極めて平易な問題」が35問並んでいた。(1)(2)は化学、(3)は「国史」とみなせるが、(4)は科目ばかりか正答も判然としない。他に大問が2つあり、「其の二」が作文、「其の三」が文章読解であった。

勤労働員と受験

1945年度の受験生である中学校生徒たちは、「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」（1944年3月7日閣議決定）にもとづき、1年間常時勤務に従事することとなっていた。所定の授業をおこなえない状況と、勤労への影響を避ける必要から、文部省は変則的な入試実施要項を決定した（「昭和二十年度高等専門学校等入学者選抜実施要項」1944年10月27

日付文部次官通牒）。特徴としては、①受験による移動を最小限にすることと、②学力を測らないことがあげられる。

①については、まず、受験者数を制限するため、官公私立の高等学校・大学予科・専門学校・師範学校等の試験日程を3期にふりわけ、各期1校のみの出願に限定した。北大予科は、高等学校や一部の私立大学予科と同じ第1期であった。

また、各校を会場とする試験の前に、一次銓衡として、出身中学校長の調査書等に基づいて定員の約2倍に絞り込む審査が加わった。北大予科では、定員400名（農類120名・医類80名・工類120名・理類80名）に対して、志願者は1943年度に5,152名、1944年度に4,744名であったが、1945年度は920名となった。実施要項に従って、定員の2.3倍を選抜したとみられる。

②については、筆答試問の目的を学力考査ではなく、「素質、能力ノ有無ヲ察知スル」ことに置き、勤労時間の長短が結果に影響しないよう特に考慮することを求めた。官立学校は文部省が作成した共通問題を用い、公私立学校は各校で作成・実施の後に文部省へ報告するよう定めている。

北大予科では、従来、下記のように科目ごとに筆答試問を課していた。

- 1942年 国史、数学及物理、英語、化学
- 1943年 国史、国語及漢文、数学、理科物象
- 1944年 国史、作文、数学及理科物象

一方、1945年度の共通問題は、「頭の働き」や「精神の能力」をはかるもの（『蛭雪時代』1945年3月号座談会）となった。

こうした筆答試問と身体検査、口頭試問をあわせた総合判定により、1945年4月、477名が北大予科に入学した。



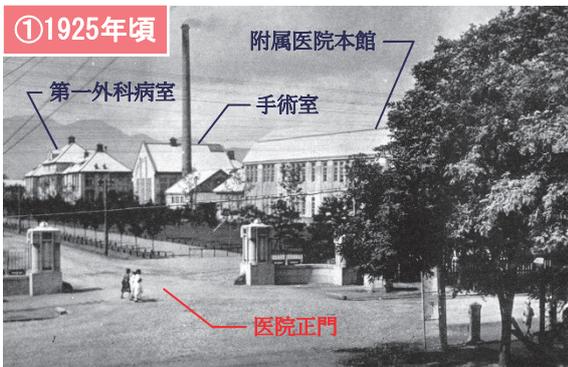
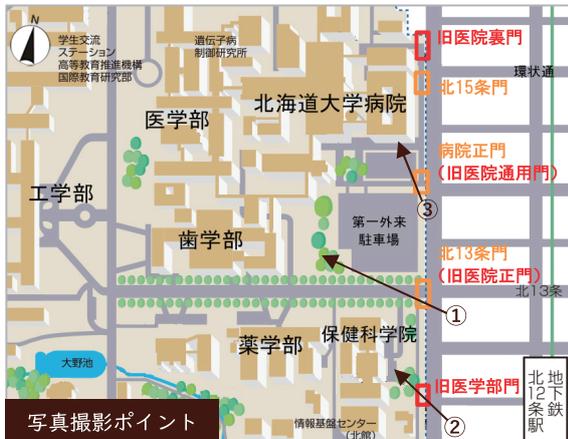
予科生の登校(1943年頃)
（高尾彰一氏寄贈資料より）

（参考）佐々木享「戦時体制下の入試（2）」『大学進学研究』No.48、Vol.VIII-6、1987年3月

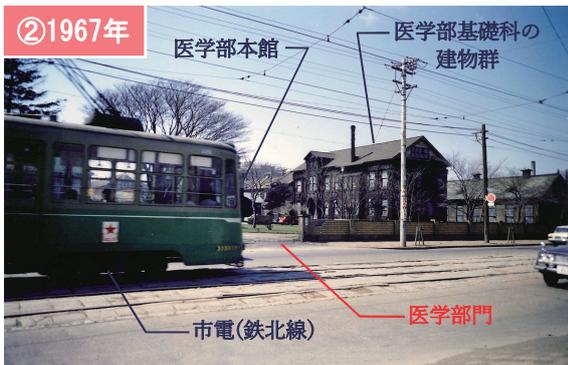
（廣瀬）

北大風景グラフIV

医学部・病院の門



(「医学部第1期卒業記念アルバム」より)



(1967年4月撮影、寺沢浩一氏寄贈資料より)



(2019年12月29日撮影)

第二農場が広がっていた北12～15条西5～6丁目あたりは、1920年から1939年にかけて大変貌を遂げた。1919年の医学部設置に伴い、現在の北13条通を境に、南側に病理学や医化学など医学部基礎科の建物群が、北側に医学部附属病院の建物が建ち並んだのである。西5丁目通に面して4つの門(南から「医学部門」、「医院正門」、「医院通用門」、「医院裏門」)も設けられた。

医学部本館(1923年新築)に向かう「医学部門」は現在の保健科学院近くにあり、「医院正門」は現在の「北13条門」あたりであった。附属医院事務所(1925年新築)に向かう「医院通用門」は現在の「病院正門」のあたりに、1922～1925年に増築した看護婦寄宿舍や炊事場(1923年新築)から最寄りの「医院裏門」は現在の北消防署幌北出張所の横に位置していた。

写真①は、西5丁目通から見た「医院正門」である。門を通り、右手に進むと附属病院本館(1921年新築)の玄関に至る。門から直進すると、右側には附属病院の手術室や病室が、左側には広い前庭を囲むように医学部基礎科の講堂や教室が並んでいた。「医院正門」は、まさに医学部と附属病院(1949年附属病院と改称)の玄関口であった。

写真②では、西5丁目通を北上する市電鉄北線の奥に「医学部門」が見える。市電は、1927年から1971年まで、北大病院前や病院通用門前に停留した。1968年、医学部は北15条西7丁目に移転した。医学部基礎科の建物群は、歯学部と歯学部附属病院が1970年まで使用した後に取り壊され、「医学部門」は1972年頃に役目を終えた。

一方、附属病院は1954～1968年に建て替えられ、旧「医院通用門」が「病院正門」の機能を担うようになった。旧「医院裏門」の位置には細道が通じていたが、1994年頃に見られなくなった。

写真③は「病院正門」である。附属病院は1988～1997年に高層化し、2003年には北海道大学病院へと改組した。現在、来院者の多くは、外来診療棟(1988年新築)の玄関や第一外来駐車場に向かう「病院正門」か、第二外来駐車場に最寄りの「北15条門」(1973年頃整備)を通っている。

(佐々木)

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

バスケットボール部の資料

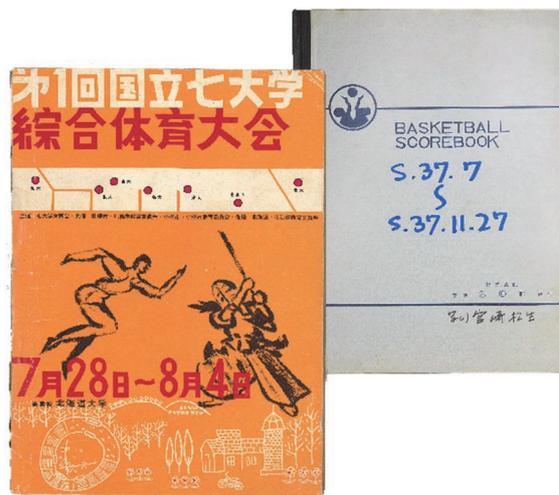
大学文書館では、馬術部の日誌、剣道部の部誌『北斗』、弓道部の「分附帳」(試合の点数表)、文芸部の部誌『北大文芸』、鉄道研究会の会誌『混合列車』など、部活動やサークルに関する資料を所蔵しています。

2019年9月～11月、バスケットボール部OBの皆さま(坂本仁彦氏・三井良一氏・酒井和人氏)より、大会プログラム、1940年代から2000年代にかけてのスコアブック、部誌『わ』1号～46・47合併号など、部の活動を表す資料をご寄贈いただきました。

大会プログラムには、1962年に開催された第1回国立七大学総合体育大会(七大戦)のものが含まれています。七大戦は、北大生が開催を企画し、第1回大会の主管校は北海道大学でした。七大戦の試合結果は、スコアブックに記録されています。

学生生活の歴史は沿革史資料として残りにくいものです。部活動やサークルに関する資料について、ぜひ情報をお寄せください。

(佐々木)



第1回七大戦プログラムとスコアブック

中谷宇吉郎博士の書画

北大にゆかりのある人物が揮毫した書画や墨蹟も、北大の歴史を彩る重要な資料です。このたび、中谷宇吉郎博士(1900-1962)が揮毫した、墨筆による書画を、7月23日に井上一彦氏より5点、11月5日に青山康彦氏より1点、受贈しました。

中谷は、1930年新設の理学部に赴任し、実験物理学教室や低温科学研究所等で、教育・研究に携わりました。文才や画才に優れた人物で、文藝春秋画廊(東京)を会場に、展覧会も開かれました(1959、1961年)。

青山氏の寄贈資料は、ご尊父の石川健康氏が中谷から贈られた掛け軸で、賛「壺中天地有」と書籍の画が描かれています。井上氏の寄贈資料は、叔母にあたる中山久子氏(物理学科1941年卒業)が中谷から贈られたもので、杜甫の詩句「十日画一水 五日画一石」と茶碗、リンゴ、菊の華、コスモス、イシダイを描いた書画です。

コスモスの書画は、1941年に「雪に関する研究」で帝国学士院賞を受賞した際、中谷が中山氏への返礼に送った書簡です。今回、皆さまからご寄附いただいた「北大フロンティア基金」により、イシダイの画とともに、額装を施しました。

(佐々木)



コスモスの書画

「学士院賞受賞に際し稀代の絶品を御祝い下さりまして御芳情 難有く(ありがたく)喜居候(喜び居りそうろう)乍簡単(簡単ながら)御礼のみ申上候」

〔活動紹介〕 日誌 pick up

講演会や資料見学会を開催しています

● 見学会《札幌農学校第2期生 廣井勇》

7月30日、高知県高岡郡佐川町より「廣井勇を顕彰する会」を迎え、同町出身の廣井勇(1881年卒業)の資料見学会を開催しました。

廣井は札幌農学校で土木工学などを学び、アメリカ・ドイツ留学を経て札幌農学校工学科教授を務め、小樽港の築港や函館港の改良などもおこないました。

見学会では、廣井にまつわる資料として、C.H.ピーボディ講義「土木学」の受講ノートや、札幌農学校の花園・樹木園計画図(廣井作成)を掲載する刊行物などを陳列しました。



● 講演会《北海道大学と花巻ゆかりの人々》



9月25日、花巻市立湯口中学校の修学旅行生を迎え、農学部大講堂を会場に、講演をおこないました。

花巻に縁の深い人物として、佐藤昌介(1880年卒業、初代総長)、新渡戸稲造(1881年卒業)、菊池捍(1893年卒業)、島善鄰(1914年卒業、第6代学長)をとりあげました。

修学旅行の引率で来札した宮沢賢治を佐藤昌介が出迎えたという報告書や、菊池捍が長野から蜜蜂を運ぶ途中で2度逃がしたエピソードを紹介し、構内ツアーも実施しました。

● 見学会《札幌農学校の寄宿舎》

12月18日、札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークを迎え、資料見学会を開催しました。

寄宿舎が1875～1903年には北1条西2丁目あたりに位置していたこと、舎室が1部屋2～3名だったこと、部屋ごとにベッドや高さ1mのストープがあったこと、学生の本棚に洋書が並んでいたことなどを、図面・写真・絵図・文書でみていきました。

北11条西7丁目あたりに移転した後に「恵迪寮」と名付けた際の回想や、大学の拡大にあわせて増築される様子も紹介しました。(廣瀬)



編集準備室日誌

- | | |
|---|--|
| 2019. 7.31 『北海道大学150年史編集ニュース』
第3号を発行 | ニューアル |
| 2019. 8. 4 オープンキャンパスにて特別企画展
示を開催、資料展示解説ツアーを実施
(～5日) | 2019.10.16 全国大学史資料協議会2019年度総会・
全国研究会出席(於:立教大学、室員
3名)(～18日) |
| 2019. 9.27 ホームカミングデーにて特別企画展
示を開催(～29日) | 2019.10.21 常設展示に「ある北大生の青春と戦争」
のコーナーを設置 |
| 2019. 9.29 常設展示「北大生の群像」の一部をり | 2019.12. 4 セミナー「大学史に学生は入っている
か」参加(於:早稲田大学、室員2名) |

資料の収集・保存にご協力を

探しています

学友会誌・
教室雑誌

学生や教職員の大学生生活、学部・学科・講座等の行事、卒業生の動向などがうかがえる、学友会誌や教室雑誌を収集しています。お手元にございましたら、ぜひお知らせください。



▲『古潭会報』 理学部地質学鉱物学科の教室雑誌 (在田一則氏寄贈資料より)

第五回目のハンマー祭は、十二月十六日の午後三時から例の部屋に於て行はれたが、今年は立派な祭壇が出来舞臺の幕がめぐらされたり、殆ど教室の全部がビラを書いたり、色々の陳列品があつたりで、その爲に別に陳列室を設けなければならなかつた程の盛會な、楽しいお祭であつた。此の日集ひ參列せる氏は清水田上兩先生の他、教室の全員であつて四一名、定刻祭場に入ればプレカーンブリアンより現在まで缺くる事のない堆積層の褶曲、斷層、貫入の著るしい地盤の上に鎮座しますハンマー神社は、始祖鳥飛び交ふレピドデンドロンの森に圍まれ、外苑にはダムイノゾアの遊ぶあり、御池にはアムモナイト、オストラゴデルミの游泳するあり、瑞雲たなびいて今日のよ



▲ 第5回“ハンマー祭”の報告(『古潭会報』第6号 1938年4月発行)、ハンマー神社祭壇

編集後記

◇巻頭コラムは、教育学研究院の近藤健一郎教授にご執筆いただきました。

◇2019年、医学部は創立100周年を迎え、木を基調とした百年記念館が竣工しました。表紙では、医学部の変遷をたどりました。

表紙図版——医学部の遷り変わり

- ・医学部本館 1925年頃
(医学部第1期卒業記念アルバムより)
- ・病院から医学部(イチョウ並木の奥)を望む 1967年4月
(寺沢浩一氏寄贈資料より)
- ・2010年、90周年記念で改修した基礎医学管理棟 2019年1月

北海道大学150年史編集ニュース 第4号

発行日 : 2020年2月25日

編集・発行: 北海道大学150年史編集準備室

〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

北海道大学大学文書館内

開室日 : 平日(月~金) 9:30~16:30

(祝日、年末年始12/29~1/3を除く)

TEL/FAX : 011-706-2395

E-mail : hu150@archives.hokudai.ac.jp

URL : <https://www.hokudai.ac.jp/bunsiyo/hu150.html>

